オレたちの妹！！

佐和月そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレたちの妹！！

【Ｎコード】

Ｎ１３３５Ｆ

【作者名】

佐和月そら

【あらすじ】

あるところに、栗谷さんというお家がありました。両親他、六男一女の大家族です。けれど、お父さんと血が繋がっているのは五男坊。お母さんと血が繋がっているのは、六男坊。元々の栗谷家には、三つ子の兄弟にひとりの妹しかいませんでした。けれども、色々と事情がありまして……。かるいタッチで書いてますので、ノリで読んでやってください。

はじめに

まずは栗谷さんちのお家事情

あるところに、栗谷さんというお家がありました。

このお家には、両親の他に、六人の兄弟と一人の妹がおりました。名前は早く生まれた順に、臣（しん）、一郎（いちろう）、功司（こうじ）、彦次（ひこじ）、一臣（かずおみ）、将（しょう）、そして、由布（ゆう）

このうち、臣くん、一臣くん、将くんの三人は、まったく血が繋がっておりません。なぜなら、栗谷家は不幸なことに、父親が二人、母親が一人お亡くなりになっているからです。

元々、栗谷家には、父梅男さんと母康子さんの間に生まれた、一郎くん、功治くん、彦次くんの三つ子と由布ちゃんの四人しか子供はいませんでした。

ところが、三つ子が小学校に入学する前に梅男さんは急死し、康子さんは周囲にも勧められて、子供たちのためにと、お見合いをしました。そのお相手が、川原臣人さん。臣くんのお父さんです。

当人同士の気があい、お互い子連れということで、ほどなく再婚しました。けれど、不幸なことに、一年も経たないうちに臣人さんは車の事故で亡くなり、栗谷家を悲しみに落としました。

だがしかし。康子さんは気丈にも堪え、一人増えた五人の子供たちを養っていこうと決心しました。

そんな頑張り屋の康子さんに、ある日プロポーズをした男性がいました。栗谷家の事情を承知の上での申し出に、康子さんも子供たちと相談して受けることにしました。そのお相手が伊藤巌さん。現在のパパです。

巌さんにも一人息子がいて、名前は和臣くんと言いました。二人一緒に栗谷家に入り、これで子供は六人になりました。

さあ、これからは幸せな毎日を過ごせる。そう思った栗谷家でし

たが、なんと、康子さんが突然死んでしまったのです。
なんということでしょう。幸せが葬式へと変わり、子供たちは憂鬱になりました。
三つ子と由布ちゃんだけが血が繋がっていて、あとはバラバラの子供たち。誰をどこが引き取って育てるかなど、うるさく周囲が騒ぐ中で、この時、巌さんは必死で思案していました。康子さんの今わの際の言葉。「お母さんをもらって下さい」という遺言を実行すべきかどうか――
朝も昼も夜も考えたあげく、巌さんはお見合いすることにしました。相手は、現在のママで、将くんのお母さんである結城萌子さん。萌子さんは康子さんの良き友人であり、突然の死に茫然としていましたが、康子さんとはお互いに子供のことで相談しあっていた仲。康子さんが何よりも子供たちのことを気にかけていたことを知っていたので、巌さんの結婚の申し出を受けました。
かくして、他人の不幸まで背負ってしまったとしかいいようのない栗谷家は、子供七人、全員で九人家族として、再々出発をしました。
けれども、さすがというか栗谷家。大変な落とし穴があったのです。
それは、こともあろうに、臣くん、和臣くん、将くんの三人が揃いも揃って、「妹」である由布ちゃんに恋をしてしまったのです。
血は繋がっていなくても、形式上では立派な兄弟。
このことを知った三つ子のお兄ちゃんズは、あの手この手を使って、三人の恋路を邪魔します。
いい迷惑なのは、由布ちゃん。六人のお兄ちゃんズと同じ高校に入学したばっかりに、色々な被害を受けてしまいます……
まあ、けれども、栗谷家の子供たちは元気に暮らしています。

1

「おい、和臣はいないのか」
三年C組の入り口で、功司は当てが外れたように教室内を見回しながら尋ねた。
「どーした？」
お昼時間。いきなりドアを開けて現れた弟に、ステンレスの弁当箱を手にして、割り箸を駆使しながら豪快に食べていた一郎が、白いご飯を呑み込みながら訊く。
「うん、和臣がここにいるって聞いたから。来週の生徒会の議題について話したいことがあったんだけど……」
どこに行ったんだろう？と当惑する功治。ちなみに和臣は三年A組で生徒会長。功治は三年D組で副会長。どういうわけか一郎も副会長である。
「そんなの、家に帰ってからにしろって。どうせ、どこでもいつでも会える奴なんだし」
「だけどね、僕としては公私混同をしたくないんだ」
家は休むもの、と決めている功治は、宿題さえ家でやらない。いつも学校で済ませているのだが、それで学年の首位を独走しているのだから不思議である。
そんな功治の実の兄でありながら、宿題の類はいつでもどこでもやらない強者一郎は、弁当箱を空にすると、口許を手でふきながら立ち上がった。
「んじゃ、捜そうぜ。おれっち、いま暇だからさ。なーに、あいつのことだから、いきつけの女のトコにでも行ってんじゃないの。あ、その前におトイレ」
鼻歌まじりに、階のすみにある男子トイレへ走ってゆく。笑いながら、功治も後につづいた。
いつもは生徒たちがたむろしているトイレの前には、珍しく誰も

いなかった。いーねえと一郎は勢いよくドアを開けようとしたが、タッチの差で内側から開き、ドアの角がもろに一郎の顔面に当たった。
「一郎！」
遠くから倒れるのを見た功治は、急いで駆け寄る。
「大丈夫か！」
「……なわけ、ないで……しょ……」
一郎は両手で顔面を押さえながら、辛うじて答える。功治は心配げに倒れた体を抱きかかえて、跳ね返って閉じたドアを訝しげに見た。
トイレのドアは、もう一度、今度はゆっくりと開いた。
「彦次！」
学校内ではクールビューティーとの評判だが、実は短気で気が荒い栗谷家の三つ子の末は、トイレの前でのびている兄の無残な姿を見ると、苦笑した。
「一郎か……まあ他の奴でなくて良かった」
かなり無責任なことを言う。
さすがに功治はたしなめる。
「おい、彦次。もろに当たったんだぞ」
「悪い。ちょっとたてこんでいて」
「こら彦次！おれっちが死んだら、どーするつもりだったんだ！」
むくっと起き上がった一郎は、右手で鼻の出張った部分を押さえる。
「大体、てめーわよ……」
「悪いな、いまお前の恨み言を聞いている暇はないんだ」
彦次は兄二人に下がるよう手振りで言って、半開きのドアをおもいっきり全開にする。
一郎と功治は、その時になって彦治が誰かを支えているのに気がついた。怪訝そうな顔つきは、だがすぐに驚きの色に変わった。
「和臣！！」

学校の生徒会長で、教師の間でも頭が鋭いとの評判を持つ栗谷家の五男が、蒼白な顔で彦次の肩に寄りかかっていた。

2

「おーい、いったいどうしちまったんだよ」
「どうしたもこうしたもないな……本当に……」
「全くだ」
広い保健室にあるベッドを囲んで、三つ子が愚痴っている。
ベッドに寝ているのは、三人によって運び込まれた和臣だ。具合の悪そうだった顔色は、いくぶん良くなっている。保険医の見立ては貧血である。
「ね……大丈夫かな……和臣お兄ちゃん」
三つ子と並んで立っているのは、担任から事情を聞かされ、授業をすっぽかしてやってきた妹の由布である。とても心配そうに、和臣の寝顔を覗き込んでいる。
「だーいじょーぶだって。そのうち、生き返るって」
一郎がげらげら笑いながら喋る。
「目が覚めたら、どうして俺ともあろう者がここにいるんだって、言うんだぜえ」
由布は口元を手で押さえながら、くすくすと笑った。
「に、してもよお。あいつらって、薄情だよな！」
「臣と将か」
「そーだよ。あいつらふざけてやんの」
一郎は両腕を組んで、口をとがらせる。生まれ月の早さで呼べば、栗谷家の長男と六男にあたる臣と将は、一郎が迎えに行った時には、もう姿を消していた。顔見知りの生徒に聞くと、将は昼時に帰り、同じクラスの臣は将を呼び戻すため、後を追ったのだという。しかし五時間目の授業が始まっても帰ってはこない。
つまり、どちらもさぼったのである。
「何のために、ここへ来ているわけ？おれっちでさえ、すっぽかしていないってーのにさ」

自分もさぼりたいと言外に匂わせて、拳を震わせる。隣にいる彦次が、呆れたように冷たい目をする。
功治も苦笑いするが、すぐに表情を引き締めた。
「ところで、彦次」
小さな寝息をたてて眠る和臣をちらりと見て、
「どうして、あの時和臣を背負っていたんだ？」
生徒会長以上に頭が切れると、生徒たちの間では評判の副会長は、不思議そうに訊く。
「偶然、和臣が倒れた場面に居合わせたのか？」
「……いや、そういうわけじゃない……」
彦次は妙に歯切れ悪く、首を横に振る。
「じゃあ、何だ」
口調はソフトだが、有無を言わせぬものがある。
彦次は和臣を支えた右肩を撫でながら、仕方なさそうに兄を眺めた。
「あまり、言いたくないんだけどね……」
なになにと顔を輝かせる一浪と、なにやら深刻そうな表情を浮かべる由布とを、それぞれ見回し、渋々喋りはじめる。
「俺がトイレに入ると、すぐに和臣の奴も入ってきたんだ。それはいいんだけど、何か様子が変で、俺のことをずっと見ているんだよ。どうしたって、声をかけたら……」
そこで、言葉が途切れる。
「その後は？」
功治は先を促した。
「そうしたら……」
彦次はいかにも言いにくそうに、
「……俺に、襲いかかってきて……」
三つ子の驚いた視線が、当事者に集中した。
「えっ！なに！お前和臣に襲われたわけ？！」
ベッドで眠る本人とを見比べながら、一郎がほっぺに手を添えて、

すっとんきょな声を張りあげる。
「和臣ってば、ついにそっちの趣味にもはしっちまったか……」
「……うそ」
由布もショックを隠さない。
「ううう、お前ら、一足先にでぃーぷな大人になったんだなあ。かなしいなあ、由布ちゃん」
「……うん。でもしょうがないかなあ」
「そーだよねえ、ううう」
「ちょっと待て！」
慌てて彦次が割り込んだ。

3

「なに勘違いしているんだ！和臣が倒れかかってきたから、とっさに避けて、ついでに顔をぶん殴ったんだ！だからこいつは気を失っているんだよ！！」

ベッド上を指す。

「そんな唾をとばしながら、言いわけしなくったっていいのにさあ」

一郎が面白半分に両手を広げて、肩をすくめるしぐさをするので、彦次の平手打ちが舞った。

はじめに尋ねた功治は、静かに苦笑している。

由布は枕元の棚にある四角い置時計に目をやった。そろそろ五時間目の授業が終わる頃である。そのまま視線をベッドに移して、小さな寝息をたてている五番目の兄を眺めた。

「……どうして、そうなっちゃったのかな……」

ぽつんと、洩らした。

2

開口一番、前九年高等学校の生徒会長で栗谷家の五男坊は絶叫した。

「嘘だあああああああああああああああああああああああああああああああ」

栗谷家のリビングいっぱいにこだまする。

「ぜえっっったい嘘だああああああああああああああああああああああああ」

「嘘じゃない！やられた俺が言っているんだぞ！！」

縞々パジャマの和臣を、普段着に着替えた一郎、功治、彦次、由布の四人がぐるっと囲んで、トイレでの一件を問いただしていた。

「ぜえったい！！死んでも俺はそんなことしない！！」

必死になって訴える和臣だが、四人のうち、被害者の彦次は凍てつくような冷たい眼差しを向ける。
「お前な……現にやったあとでそんなことを言っても遅いんだよ！！」
和臣は一度保健室で目を覚ましたのだが、またすぐに寝入ってしまい、仕方なく三つ子の兄弟が家まで運んだのである。
「なんだとお！」
まるで鬼にでも追いかけられているかのような必死の形相で、和臣は敵意を剥き出しにする。
「てめーには覚えがあっても、俺にはぜんっぜんないんだよ！夢でも見たんじゃねーのか！！そーゆうおぞましい妄想をよお！！」
「なんだって！口の減らない奴だな！！恥ずかしいなら恥ずかしいって言え！！」
「なんだとおお！！」
「あー、ちょっと待って、二人とも」
ダイニングテーブルを挟んで、取っ組み合いの喧嘩にまで発展しそうだった言い争いを、功治が片手をあげて制止した。
和臣と彦次は、同時に功治を睨みつける。
「まあ、二人の気持ちもわからないわけではないけれど、ここはきちんと事実を把握しておいたほうがいい」
もっともなことを口にして、まず和臣の方を向いた。
「和臣の言い分は、昼食を終えたあとにトイレへ行った。そこで彦次を見かけた。けれど急に気分が悪くなって、倒れた。そのあとのことはよく覚えていない。これでいい？」
和臣は仏頂面で頷く。
次に功治は彦次へ顔を向けた。
「彦次はトイレに入った。その直後、和臣が入ってきて、いきなり襲いかかってきた。自分の身を守るため、和臣のことを殴った。あってる？」
「……ああ」

和臣をキッと睨みつけながら返事をする。相手も負けず睨み返す。
功治は思索するように俯いて、足を組んだ。有能で頭が切れる副会長へと変貌する。
彦次と和臣はしばらく睨みあっていたが、やがて互いに顔を背けた。
怒鳴りあいの戦場だったリビングが、急に静かになる。その場の空気がやや気まずくなりかけた頃、今まで一言も喋らなかったお祭り男の一郎が、黒いソファーの背に体を投げ出して、テレビの真上にある壁時計を見た。
「臣と将、遅いな」
別に心配しているわけでもなさそうに言う。
「遅いね」
隣に座って事のなりゆきを見守っていた由布も、相槌をうつ。

4

だが気分が最悪の四男坊と五男坊は、まるで明日は槍が降りますとでも言われたかのように憤慨して、一郎だけに喰ってかかった。
「なにお馬鹿なこと言ってんだよ！！」
「どうせ朝帰りに決まっているだろう！！」
再び、両者は睨みあう。
「あんだよー、腹立っているからって、おにいちゃんに八つ当たりすんなよ！」
一郎は口を尖らせて抗議するが、返ってきたのは冷たい一言だった。
「だったら、俺の前から消えれば」
発言者は三つ子の末っ子である。
一郎はよよよ！と顔を手で覆った。
「う、う、う、彦次がおにいちゃんのことをいじめる～」
泣くふりをするが、誰も突っ込まない。
「こーじくん、みんなが冷たい～」
しょうがないので、隣で考え事をしている弟に泣きついたが、相手にされなかった。
「ううう、おれっち、なんて可哀想なんだあ～」
一郎はさらに泣き崩れる。和臣は「アホ」と罵り、彦次は「まぬけ」とこきおろす。
由布はこんな状況でとは思いながらも、笑いたくなるのを必死で堪えた。

その夜である。
由布は中々寝つけなかった。早めに布団をひいて、夜十時を過ぎた頃には布団にもぐったのだが、それからが長かった。

どうしたんだろう……何十回目かの寝返りをうって、瞼をあける。
なんでこんなに目が冴えるんだろう。由布は暗い天井を眺めながら、あれこれ考える。
（やっぱり、和臣お兄ちゃんのことかな）
昼間、一郎から呼び出しを受けた時、由布は仲良し友達とお弁当を広げ、好物のエビフライを食べるところだった。用件を聞いて、急いで弁当をしまい、保健室へ駆けつけたものの、やはり未練が残っていた。
（食べたかったな、エビフライ……）
今頃は、栗谷家の番犬である柴犬タロウのお腹におさまっているはずである。
すると自分のお腹が、ぐぅっと鳴った。
「まったく、食べ物のことなんか考えているから、眠れないのよ」
布団から抜け出し、部屋を出た。トイレにでも行って、寝直そうと思った。
真夜中である。小さな明かりをつけた階段を下りるたびに、ギイ、ギイと音が鳴る。
（そういえば、臣お兄ちゃんと将お兄ちゃんは帰ってきたのかな？）
階段の下には蛍光灯のスイッチがあり、それを押すと、廊下がぱあっと明るくなる。トイレは玄関に面した廊下の奥にあり、由布はちょっぴり安心しながら、奥にあるトイレのドアへ向かった。
（ん？）
手前に影が見える。
「だれ？お母さん？お父さん？お兄ちゃん？」
両親は一階で寝ている。兄たちは二人一部屋で二階にいる。てっきり家族の誰かだと思ったのだが、返事がなかった。
「誰！」
由布は立ち止まり、不安な気持ちを抑えながら詰問する。
すると、それは一瞬おどけるように動き――次の瞬間、由布へ襲いかかった。

――栗谷家の屋根がひっくり返るほどの悲鳴がこだました。

5

まっさきに反応したのは、二階だった。ドアがぶっ壊れるような激しい物音がしたかと思うと、ダダダダダとまるで道路工事で使う機械のような音が階段を下りた。

「由布！」

お兄ちゃんのひとり、体操部所属の臣が駆けつけ、それへ飛び蹴りを喰らわせた。続いて、

「由布！大丈夫か！」

栗谷家六人兄弟の末弟でありながら一番の長身男将が、臣と同じく蹴りを入れる。

「由布！今の悲鳴は何だ！」

一郎と彦次も駆けつけた。

「待ってよ！お兄ちゃん！」

由布は慌てて兄たちの行為を止めさせようとした。自分へ襲いかかってきたのが誰なのか、わかったからだ。

最後に、階段を転がり落ちるようにして功治が現れた。

「おいやめろ！和臣が死んでしまう！！」

殴る蹴るが、ぴたっと止まった。

「和臣？」

栗谷家の兄弟たちは、めいめいそれを見下ろす。

栗谷和臣――旧制伊藤和臣は、口から泡を吹いて気絶していた。

3

午前四時。白いレースのカーテンで覆われている栗谷家の窓は、ぼんやりとだが明るい。

その居間には、七人兄弟が勢揃いしている。ぺかっと光っている蛍光灯の下、疲れ切った顔をしている和臣を囲むように、臣、将、

一郎、彦次、功治、由布がいる。だが、さあこれから朝日を迎えて今日も一日頑張ろう！と拳をあげるような雰囲気では全くなかった。
「いい加減にしろよ、和臣」
その場の空気を象徴するかのように、怒気をはらんで言うのは彦次である。
「お前は俺だけじゃなくて、由布にまで手をだすなんて、恥を知らんのか」
幾分押さえた口調だが、その分怒りが増大しているのは、火を噴くような表情を見ればわかる。
隣に座る一郎も、腕を組んでうんうんと頷く。
「かずっちはさあ、一度病院へ行って検査してもらった方がいいって。次におれっちなんか狙ったら、遠慮なくボコボコにしちゃうからね」
よれよれの黄色いパジャマを着ているので、いまいち真面目くさった顔つきが似合わない。
「だめだめ」
小柄な体つきながら体操部のエースである臣は、一郎の隣で手を振った。
「こいつ、刑務所に入れようぜ。もう栗谷家の人間じゃねえ。なあ、将」
「そうだな」
栗谷家の末弟という立場でありながら、兄弟のなかで一番長身でスタイルも頭の出来も良い将は、外見に似合わないナナメな性格そのままに、冷たく突き放した。
「お前は異常だ」
四人の過酷な言動の行列に、目の前でうなだれている和臣は、ますますしおれた葉っぱのようになる。その隣に座る功治は、和臣の弁護士のように、慌てて割って入った。
「おいおい、何もそう冷たく言わなくてもいいだろう」
「そうだよ、和臣お兄ちゃんも、悪気があったわけじゃないだろう

し」
功治と一緒に和臣の両隣を陣取っている由布も弁護する。
だが、四人は一斉に言い返した。
「あに言ってんだ！」
「功治は人がいいからな！」
「由布は優しすぎるんだ！」
「俺は許さん！」
ぐわあっと牙を剥くような調子である。
「でもね」
功治は気の荒い猛獣を鎮めるかのように、両手を前へ押し出して、
「おかしいと思わないか？前の時だって、和臣は覚えていないって言うし。今度のことだって、どうしてお前たちに殴られたかわからないって言っているんだ。そうだろう？」
枯れた葉っぱが地面に落ちるように、和臣は頷く。

6

「まるで一種の夢遊病みたいだ」
功治は一同を見回す。
「けれどそうじゃない。和臣はトイレへ行こうとしたことまでは、きちんと頭に残っていると言っている。夢遊病とはもっと違う……なんていうか、そう……暗示をかけられている感じだ」
「暗示？」
功治は真面目だった。
「キィワードは、トイレだと思う」
栗谷家の居間は、一瞬の静寂のあと、大爆笑で揺れた。
「何でトイレなのさ！！」
「アホくせえ！」
一郎と臣はお腹をかかえて笑っている。
「功治は考えすぎて、お笑いに走ったんだな」
面白くもなさそうに、彦次は呟く。将が無言で頷いた。
しかし、当の本人は本気だった。
「だって、そうとしか考えられないだろう？」
前九年学校の生徒会室で会議を主催する時と同じく、真剣に説明をしはじめる。
「和臣がおかしい行動をとるのは、決まってトイレ付近だっただろう？彦次の時しかり、由布の時しかり。しかも本人はその時の記憶がないと言うんだ。冷静に考えれば、何らかの理由があるとしか思えない。僕には、暗示をかけられたという説が一番しっくりくるんだけどね」
「うーん、なるほどなあ」
単純な一郎が、最初に納得する。
「そういや、この間のテレビでもそういうこと、やってたよなあ」
「そうだっけ？」

臣は胡散臭げだ。
「臣ちゃん、おもしれーって見てたじゃん」
「んな昔のこと、忘れたよ」
三歩歩けば忘れる特技の持ち主は、鼻先で吹き飛ばす。
「オカルトドラマじゃあるまいし、そんなバカな話あるわけねーじゃんか、なあ」
「まったくだ」
と、冷たく相槌を打つのは彦次である。
「そんな鼻から牛乳を垂れ流すようなアホ話、よく思いついたもんだ。実際に襲われていないから言えるんだな」
「そんな……」
由布は泥沼にハマるように落ち込んでゆくのが見て取れる和臣を弁護すべく、必死に言葉をめぐらす。
「功治お兄ちゃんの話は、ちょっと不思議だけれど、でも嘘じゃないかもしれないじゃない？そういうこと、あるかもしれないよ。今、クラスで糸巻きが流行っているし」
「糸巻き？」
由布は身振り手振りで説明する。
「こう手首に巻きつける仕草をして、その人の目を閉じさせてから、その糸を引っ張る仕草をするの。するとね、びっくりするんだけど、腕が自然にあがるの。不思議でしょ？」
「あに、それ」
糸を巻きつける仕草をされた一郎は、自分の手首を見つめる。
「一郎お兄ちゃん、目をつぶって」
「ういっしゅ」
一郎が両目を閉じると、由布は糸を巻くように両手をぐるぐると回した。すると、一郎の両腕が自然に持ち上がった。
「うおおおお！あによ、これ！」
一番びっくりしたのは、本人である。
「なんか、強い力で引っ張られたみたいよ、おれっちの腕」

「でしょ？」
由布は右手を動かして、糸を断ち切るような動作をする。
「でも人によって違うんだ。すぐ上がる人もいれば、全然動かない人もいるの」
「由布ちゃんはどっちよ」
「全然ダメ」
残念そうに肩をすくめる。
「友達はすいすいと上がるんだけど」
「えへへ、おれっちフシギ体験しちゃったのかなー」
一郎が得意げに鼻をこする。が、すぐに居間を漂う白けたムードに気づき、姿勢を正した。

7

「それで？」
彦次は寝起きを叩き起こされたかのように、機嫌が悪い。
「由布は何が言いたいんだ？」
「えっと……だから、これも一種の暗示なのかなあって。功治お兄ちゃんの話を聞いて思って」
「そうだね」
功治だけが真面目に聞いていた。
「それもひとつの暗示だよ。事前にどうなるか話しておいて、頭にインプットさせておくんだ。そして実際に行って、相手は手が引っ張られていると錯覚するんだね」
「一郎は単純バカだからな」
彦次は全く容赦がない。
「それじゃあ、和臣に糸でも縄でも巻きつけて、やってみるか？」
功治は「いやそうじゃなくて……」、一郎は「単純バカとはあによ」とそれぞれの立場で反論しかけたが、臣の大あくびが遮った。
「もうやめようぜ。いくら話し合ったって、和臣の馬鹿が改心しなきゃどうしようもねーんだからさ。俺、眠いからもういっぺん寝るわ」
腕を伸ばしながら、眠たげに立ち上がる。よく見れば、目の下に黒いクマがある。
「俺、ここんとこクラブで忙しかったからさ。自分でも何やってたか記憶にないくらい疲れてんだよ。だから和臣になんか付き合ってらんねーぜ。もう功治に任せるから、しっかり見張れよ。由布も和臣に近づくな」
激烈に言い残して、二階へ向かう。それもそうだなと彦次が後につづき、一郎もうんうんと唸りながら腰を上げかけた。
「ちょっと、待て」

突然、無口な将が口をひらいた。三人は同時に末弟へ振り返る。
「俺、今思い出したけど」
臣にちらりと視線をおくって、
「お前、何か和臣にやってたよな？」
「……俺が？」
「やってたよな」
念を押す。
臣は一階の手すりにもたれかかり、小首を傾げて、天井の白い壁を睨んだ。そうすることおよそ一分弱。何かが閃いたのか、あっと手を叩いた。
「そうだ！催眠術だ！」
功治がまっさきに反応した。
「催眠術って、やっぱり何かしたのか？」
「そうそう」
臣はなにやら興奮している。
「友達がそういう本を持っててさ。この間だったか、テレビでそういう類の番組をやってただろ？あれ見て、俺もやってみたくなって借りたんだ。けどさ、あれって意味がめちゃくちゃわかんねーの。一応、本のとおりにやってみたんだけど、その時は何にも起こんなかったし。何だ、きっちりかかってたんだ！すげーじゃねーか、かず……」
臣は言葉を切って押し黙る。
濡れ落ち葉のように小さくなっていた和臣が、むくっと上身を上げると、やおら立ち上がった。唖然とする兄弟たちには構わずに、栗谷家の長男へゆっくりと近づくと、引き攣った頬でにっこりと笑った。
「……俺、ほんとに馬鹿だよな、臣……」
「か、かずお……」
「お前に言われるまで、すっかり忘れてた……」
後退りする臣の肩を掴むと、拳をつくった右手で、迷うことなく

臣の頭をばこんとぶん殴った。

8

4

「由布ちゃん、よく眠れた？」
台所で七人分の弁当を作っていた萌子は、制服に着替えて現れた由布に、、おはようと挨拶する。
「昨夜はびっくりしたわね。まさかゴキブリが出るなんて」
おはようと由布も返して、眠たげな目を丸くする。
「ちゃんと掃除をしているのに。なんかショック」
「そうよねえ。今度の休みは台所掃除で頑張らなきゃ」
ゴキブリという言葉をおぞましそうに語る萌子に同調しながらも、由布は心の中でごめんなさいと謝っていた。昨夜の自分の悲鳴を、両親にはゴキブリに遭遇したということで説明したのである。
「でも、お兄ちゃんたちがすぐに駆けつけてくれたから、心強いわね。私も巌さんもあまり家にいないから、心配なんだけれど」
「大丈夫。お兄ちゃんたちがいるから」
栗谷家の両親とも共働きである。そうでもしないと、家計が追いつかないのである。そのため、栗谷家の兄弟たちの掟には、けっして両親に心配事をかけてはならないという項目がある。
由布は白いお茶碗にご飯をよそうと、テーブルについて、自分のお箸をとった。
「それにしても、すごい音がしなかった？きっと大きかったのね」
「うん……でっかくて、退治するのにね、大変だったの」
神妙に答える。
（だってねえ、お母さん）
その時、階段を駆け下りる大勢の足音が聞こえ、「急げ！」という掛け声と共に現れたのは、栗谷家の五男坊だった。
「お早うございます！」

母親にはいつも礼儀正しい和臣である。座っている由布へ元気に挨拶をした。まるでトイレですっきり爽やかになったかのように、表情が明るい。
由布は気づかれないように苦笑した。
（和臣お兄ちゃん、よっぽど気が晴れたみたい）
和臣の後から入ってきたのは、次男一郎と三男功治である。
「おっはようございまーす！」
「お早うございます」
萌子は弁当箱を一つ一つ包みながら、揃って現れた三人の息子たちに目を丸くする。
「今日は早いの？」
「そうなんです。今日は生徒会の都合で、早く行かなきゃいけないんです。だから、朝食はいいです」
「まあ……教えてくれたら、早く起こしたのに」
「高校生にもなって、お母様のお世話になっていたら、副会長は務まりましぇん」
一郎がふざけて答える。隣で功治が笑いながら、弁当箱を受け取って鞄へ詰めた。
「あ、そうだ」
同じく弁当を貰った和臣が、ふいに何かを思い出したように、萌子へ伝えた。
「臣は、今日休むようなんで、起こさないで下さい」
「あら、どうして？」
「具合が悪いそうです」
「あら……大丈夫なの？」
「寝ていれば治りますよ」
しれっと言う。背後にいる一郎と功治は顔を見合わせ、由布は危うく吹き出すところだった。
萌子は心配そうに首を傾げたが、常日頃から信頼している和臣の言葉なので、「臣君の様子を見てくるわね」と、二階へ向かった。

「じゃあな、先に行っているぞ、由布」
和臣はいつもの凛々しさを取り戻した格好で、片手を上げる。三つ子の二人も交えて、三人は怒涛のごとく出て行った。
入れ違いに現れたのは、将と彦次である。
「臣お兄ちゃん、大丈夫？」
栗谷家の長男と同室の六男は、由布の真向かいに座ると、さあなと大あくびをする。
「今、お袋が見に行ったけど、どうだかな。布団の中で唸ってたからな、あの馬鹿は」
「自業自得だ」
彦次は冷蔵庫から牛乳を取り出し、ガラスのコップになみなみとそそぐ。
「俺が和臣でも、同じことをする」
「そうだな」
由布はお茶碗を片手に、天井を見上げた。
「えーと、和臣お兄ちゃん、結局、同じことしたの？」
「そう、臣が借りていた本を開いて、何か一生懸命やっていた。臣の奴、悲鳴あげてたな」
「ずっとトイレを行ったり来たりしているぜ。一体、何をかけられたんだか」
彦次も将も他人事のように喋っている。
由布はお箸を口に含んだまま、うーんと天井を見つめている。
「あのね……ところで、和臣お兄ちゃんの方は、大丈夫なのかなあ……」
それに対する返事は、兄二人とも至って薄情だった。
「さあ、知らん」
由布は肩を落として、ふうとため息をつく。
なにやら、二階で物音がした。
栗谷家の騒動は、しばらく続きそうである。

―完―

8（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます（≧≦）
ブログでも他に小説を書いていますので、よろしかったら、ご来店下さいませ。
「月夜ノ晩ニ見ル夢」ｈｔｔｐ：／／ａｍｅｂｌｏ．ｊｐ／ｔｕｋｉｙｏｒｕ／ｅｎｔｒｙ－１０１０２１５６３６７．ｈｔｍｌ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1335f/

オレたちの妹！！

2010年10月8日15時47分発行